万葉集研究の頂点を示す

円熟期の折口信夫座談録

折口信夫対話3

万葉集輪講

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄＋角川源義

折口信夫の名は、その学問内容の何たるかを越えて、今や、広く一般に知られるようになった。しかし、その知名度に比して、折口学への一般人の理解は、きわめて稀薄であるといって過言ではあるまい。それには文体の特異性にも一因があろう。だが何よりも、この学問の広さと深さが独特の難解さをもたらしているところにある。その意味で、ナマの言葉に直接触れうる対話集は、書かれた著作では窺いえない貴重な示唆を放っているといえよう。初めて一本として刊行される本篇は、万葉集解釈における詩人・釈迢空、学者・折口信夫の感性と方法を知る上で、貴重な一冊である。

角川選書—94

角川選書——94

折口信夫対話3—万葉集輪講

昭和五十三年八月三十一日　初版発行

編者—池田弥三郎＋
岡野弘彦＋
加藤守雄＋
角川源義

©Shinobu Orikuchi etc.

Printed in Japan

発行者——角川春樹　発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—三—三　郵便番号一〇二
電話東京〇三—二六五—七二一（大代表）　振替東京三—一九五一〇八
装幀者——杉浦康平　協力——鈴木一誌＋杉浦冨美子
印刷所——新興印刷株式会社　外装印刷——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所
定価はカバーに明記してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
0395-703094-0946(0)

折口信夫対話3

万葉集輪講

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄
＋角川源義

角川選書—94

*

折口信夫対話3

―万葉集輪講―

編＝池田弥三郎＋岡野弘彦＋加藤守雄＋角川源義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

*

目次

一　天皇と志斐嫗との問答歌その他――――――七
大橋松平・岡山巌・中野重治・
西角井正慶・藤森朋夫

二　長田王と石川大夫との問答歌――――――五三
大橋松平・西角井正慶・藤沢古実・
藤森朋夫

三　人麻呂の羇旅歌Ⅰ――――――九一
大橋松平・西角井正慶・藤沢古実・
藤森朋夫

四　人麻呂の羇旅歌Ⅱ――――――一三九
大橋松平・西角井正慶・藤沢古実・
藤森朋夫

五　黒人の羇旅歌Ⅰ　一八九
大橋松平・西角井正慶・藤沢古実・藤森朋夫
六　黒人の羇旅歌Ⅱ　二三七
大橋松平・西角井正慶・藤森朋夫・
七　旅人の望郷の歌　二七一
大橋松平・西角井正慶・藤沢古実・藤森朋夫
八　金村の塩津山の歌　三三
西角井正慶・広野三郎
九　赤人の池の歌その他　三五
西角井正慶・広野三郎
十　笠女郎の家持への恋歌その他　三七
西角井正慶・広野三郎・穂積忠

十一　赤暦と娘子との相聞歌――――――――三七七
西角井正慶・広野三郎・穂積忠
十二　旅人の妻への挽歌Ⅰ――――――――四〇三
西角井正慶・穂積忠・柳田国男
十三　旅人の妻への挽歌Ⅱ――――――――四二三
金田一京助・西角井正慶・穂積忠・
柳田国男
解説――――――――岡野弘彦――四五一
あとがき――――――――池田弥三郎――四五八

〔注：座談者名は、五十音順〕

一　天皇と志斐嫗との問答歌その他

大橋松平＋岡山巌＋中野重治＋西角井正慶＋藤森朋夫

大橋　今晩は、どうも御多忙のところ、お寒いのに御足労いただきましてありがとうございました。万葉集の綜合研究を第二巻までやったのでございますが、その後少し模様を変えてみたいというような気持ちで、中止の状態になっておりましたところ、去年ごろから折口先生に御相談して何か名案はないものだろうかしらんと思いながら、御相談が延び延びになっていたのを、つい先ごろいろいろ御相談しましたら、そうだね、多少おもしろみのあるようにやったほうがいいだろうな、というお話で、輪講式に一つやっていただくようにお願いしたわけであります。その時御相談して、まあ、いろいろ多方面のお方もおられるだろうが、差し当たり今晩のようなお顔触れをお願いしたわけでございます。万葉集と申しますと、私どもそういうことを扱う仕事をしておりましても、全く素人でありまして、この座談会の司会はとてもできそうもありませんので、一つ、藤森さんとか、西角井さんに助け舟になって、加勢をしていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、どういうようにやったらよろしいでしょうかね。第三巻を初めから……。

折口　こんどはまず、小手調べというところで、初めからして見て、二度目から飛び飛びにしたらよいかと思います。そうして、こんどは思い切って割合に、早く済ませられるようにしたらよいんじゃないでしょうか。問題にかける歌については、従来の綜合研究どおりの態度でしていただいて、そのうち、万葉研究の新しい方法を発見するというほうへ関心を向けながら続けて行ったら、きっと変わった方向をも会得することができようかと存じます。どの道、今までどおりの態度で、いつまで万葉研究も続けて行けるものではありますまいから。

西角井　先生に質問をして進めて行くような形でもできるかと思いますが、この前にやったように

まず読んで意味を言って……。でないと幕が開かない。

大橋　そうですね。それからいろいろ深く入って行くほうがいいんじゃございませんかね。

折口　巻の三について、お話ございませんか。

大橋　巻の三の特殊性などについて、多少やっていただきますと……。

折口　それじゃあ、私、口切りに申します。どうぞ、皆さんも、御遠慮なくおっしゃってください。興が乗ってくれば、失礼なことも言いかねますまいが、その点はあらかじめお許し願っておいて。万葉集の巻一と二とは、どうかすると、勅選の意味があるとまで言われておりますけれども、もっとも、序の書き方などでも、一と二とでは違うくらいですから、まして三、四になると、その態度がだいぶ崩れてくる、ということは昔から言われているとおりです。まず真淵などでも、この巻あたりから、巻の順序を変えております。事実、この巻を見ましても、三と四とは内容の通じたところのあるものですし――内容といっては語弊があるけれども、とにかく、編集の体裁の通じたところがあって、それで三、四という区画を取り外しても一つになればなるものですが、そのうちこのことはもうすでに他の方も御注意なすっていらっしゃるし、沢瀉さんなどははっきり書いておられますが、私どもは早くから、万葉に対して大伴家持を通じて、大伴家全体に属する歌というものが、万葉集に随分入っている。それには一遍、万葉集の材料が大伴家をば通っているだろうというような見当をつけて、昔から申しているのですが、この考えは、全部採用せられないまでも、ある部分部分までは、必ずしも反対は見えないように傾いてきました。巻一、巻二あたりは、その匂いの非常に薄い、ほとんどないといってもよいくらいに見えますが、それでもあります。三、四になると、もうはっきり、大伴氏の色彩が濃厚になってまいります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さて初めのほうは、一、二以来の習慣で、三、四でも、挽歌にしましても、相聞にしましても、古い歌が載っているように見えますけれども――いわば上に載せてあるような形なのです。――やかましく言えば、相聞（四）のほうの難波天皇妹とあるのは、「難波朝右大臣」などある例から見ても、孝徳天皇でいらせられることになるでしょう。――やはりどうしても主なる部分は、一、二の体裁を表面学んでその根底は、大伴氏に関係のある歌からできたのだと思います。しかしその中でも、雑の歌には、古い歌が多いほうでございます。今言いましたような大伴家の色彩というものは、三、四にはっきり出ております。順序は三、四が一、二の次にあったかどうかということはもとより困難ですけれども、それを今問題にしていたら限りがありません。真淵みたような仕事をしなければなりません。もっとも、これを正しい方法でするのも、一つの新しい研究法になるのですが……。まず今はただこの順序に合った本をたどれる限りの古い形と見るほかはないのですから、そういう見当で見ていただくことにいたしましょう。万葉集中の柿本人麿の歌も、皆さん御存じのとおり、巻の二から三がいちばんたくさん出ておりますので、その他の古い歌人の歌でも、相当の分量がこの巻には出ておりますが、それは大伴氏の手を通る前に、すでにでき上がった成書としての集があったのか、それとも大伴集の中にそういうものをば包含しておった――つまり大伴家の集に何かの関係でそういう歌を取り込んでおったか、それとも以前そういうものがあったところへ大伴氏の歌がくっついて――他の家々の家集にもその傾向が後々まで見えますように――行ったか、こういうことになるだろうと思いますけれども、それはどこまで行っても解決のつくことでもなし、断案などはもとより下すことはできませぬ。なにしろ、この三と四を通じて見ますと、万葉の巻一、二と似ておってしかも相聞の歌の中に譬喩歌という性格を見出してきているというわけで、新しい

時代を暗示している分類ができてきているのです。その点も注意すべきかと思います。だが、これは別に新しいことではございませぬ。まあ、そんなことで先へ行きたいと思います。

雑歌

天皇御二遊雷岳一之時、柿本朝臣人麻呂作歌。一首

三三五 皇者神二四座者、天雲之雷之上爾　廬為流鴨

右、或本云、献二忍壁皇子一也。其歌曰、王神座者、雲隠伊加土山爾宮敷座

天皇賜二志斐嫗一御歌。一首

三三六 不聴跡雖云　強流　志斐能我強語。此者不聞而、朕恋爾家里

志斐嫗奉レ和歌。一首　嫗名未レ詳

三三七 不聴雖謂　話礼話礼常　詔許曾、志斐伊波奏。強話登言

折口 それでは失礼ですが、私が啓蒙の部分を受け持ちます。

「雑歌」、あるいは「雑の歌」と読んでいいでしょう。もちろん「くさぐさのうた」と意訳すべきではありません。「天皇、雷岳に御遊する時、柿本ノ朝臣人麻呂作る歌一首」。なるべく、記録読みふうにぶっきらぼうに読むほうが、かえってよいでしょう。歌の本文訓は最初旧訓を読みましょう。

皇は神にしませば天雲の雷の上に廬するかも

訓みは旧訓にしますけれども、訳は旧訓のとおりでは訳することができない場合が多いのですから、その点自由にさせてもらいます。訳と関連しては、自分の読み方を言うておく責任がありますから、その点だけ申して、後の訓み方は、西角井君なり、藤森さんなりに願いましょう。

皇は　神にしませば、天雲の雷の上に　廬せるかも

という訓み方によって申しておきます。別に、普通の訓み方と変わってもおりません。口訳もついでにしましょう。天子様は、神でいらっしゃるから、あの雷の上で、小屋がけ――または小屋づくり――していらっしゃることよ。

左註に行きます。

「右或本に云はく」。旧本では、「忍壁皇子に献れるなり。その歌に云はく、」

王は　神にしませば、雲隠れ　雷山に宮敷きいます

これもついでに、口訳いたします。この場合は、

おほきみは神にしませば、雲隠る　雷山に宮敷きいます

〔口訳〕天子様は神でいらっしゃるから、あの――またはこの――雷山に、宮を占めて――宮地の区画をして――いらっしゃる。

このはしがきで、お考えはございませんか。

西角井　雷のことは巻二にも出ているかもしれませんが、もう一遍御説明なすったほうがよくはないでしょうか。

折口　（藤森氏へ）ここのはしがきに何かお説はありませんか。

藤森　そうですね。別に新しい説というわけではありませんがひとつ。今までの巻一巻二には、た

とえば「藤原宮御宇天皇代」と記し、次に「高天原広野姫天皇」というふうに記載されてあるのが一つの形式となっていましたが、ここのように最初から「天皇、雷岳に云々」と書いたものは見られませんでした。そこで童蒙抄には「何宮に御宇天皇代と云標題を落脱したると見えたり」などといっておりますが、にわかにそう決めるわけにもゆきません。やはりここの天皇は持統天皇であらせられるという説が妥当と思われます。

西角井　これは今でもなんでしょうね、甘檀丘一帯と思っていない考え方がまだあるでしょう。

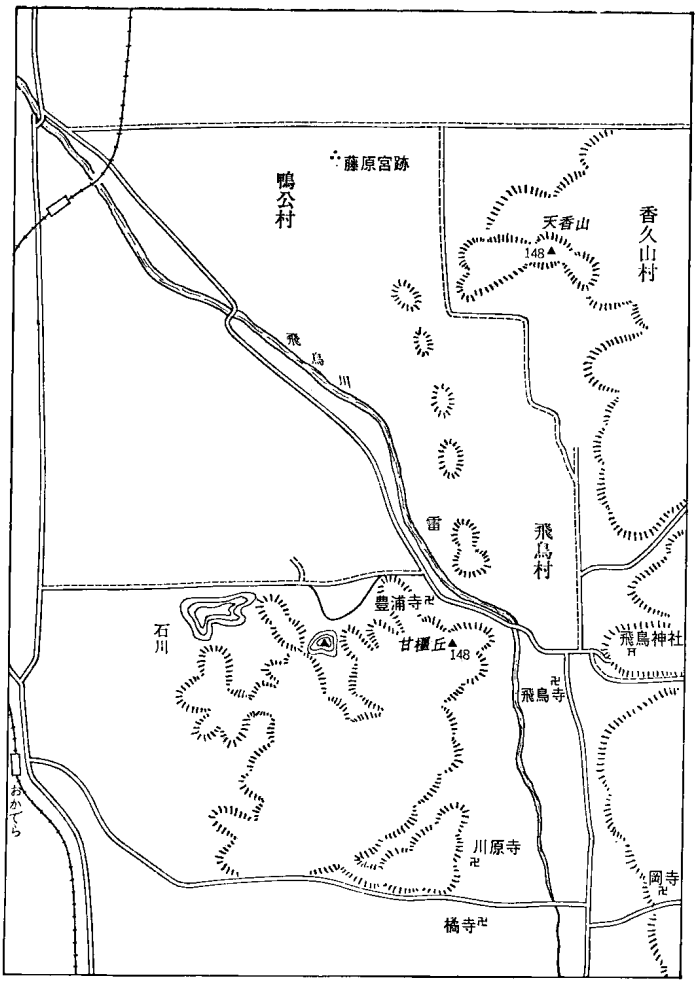
折口　多いでしょうね。これを雷岳と言うか、神岳と読むか、どっちがようございましょうかね。

藤森　やはり雷岳と訓むほうがよろしゅうございましょう。

大橋　地名が今でも残っているんですか。

折口　今でもあるんです。それだけに疑問があります。それじゃあ、私の僻説を聴いていただきましょう。これは、阪口保君の昔「短歌研究」の付録に出されました「万葉大和地理辞典」――これは万葉研究文献中の一つの名作です――に詳しく載っておりますが、（参謀本部五万分図を示して）これが橘、これが川原、それから丘陵をはさんでこれが雷で、この道に沿うて飛鳥川が流れております。この飛鳥川の西岸、岡から西北、飛鳥から、西南、雷の川向かい、豊浦の上―南―川原の北に当たり、石川の東にある――これが、私の考えているここの雷岳です。飛鳥の神奈備というのもこれです。かみをか（神岳）、神南備の三諸山も古く甘檀岡も同じ山です。ここで、御覧のとおり川を隔てて雷の村の孤立した岡が続いておりますね。この私の言う雷岳郷、神南備を普通学者は甘檀岡だと言っています。甘檀というのは、私の言う雷岳から、川向かいの今の「雷」、それからぽつぽつと三つ四つ間の切れた丘陵が見えましょう。これらを包含して言うたのです。御承知のとおり藤

原の都は鷺栖阪の北と書いてある。その鷺栖阪は、甘橿丘の中でした。そうすると甘橿というのはこの地形全体にわたっての称えだったことになります。（五万分図「桜井」参照）大きい地図だと、もう少しよく、丘陵の断片が現われてきているので、これはどうあっても、開墾したために孤立した岡の群れなのです。甘橿丘が分岐して崎をなしている。その根元が、今の大字「雷」の岡で、これからずっと延びています。そうして、本の岡と、崎とのつけ根を飛鳥川が切り開いて流れている。それで今の岡が、飛鳥の神奈備のあった山で、当時の雷ノ丘、古く甘橿丘の主なる部分になる。それが神岳にも当たるわけです。石川精舎がこの辺で、ここへ後に建った寺を、「神奈備山」と称していましたから、この岡が神奈備山だったことが考えられます。私の祖父はこの神奈備から移った飛鳥の社から出た者で、そんな関係から、それに執着して調べておりますのですが、私の思っている雷というのは、実はやはりここで、大字「雷」ではないのです。神岳・雷岳・三諸山と申すのは、皆この山の中にあったのです。だから、この山全体が、その一部かは知らないけれども、御覧のとおり今の雷にある雷岳というものは、非常に小さいでしょう。開墾しない前から相当大きかったかもしれないけれども、どうも信じられません。それからこれが安居院。昔の飛鳥寺の跡に建ったものなのです。この庭に佐佐木さんの書かれた山部赤人の歌碑が建っております。あの長歌の神奈備山から見た景色というのは、おそらくこの岡の西北の鼻の所から見た景色ではないかと思っておりますが、どのみち古代地理というものは水掛け論になりやすいのですから、大して固執はすまいと思っておりますが、実地に臨んでも、なお旧説にとらえられ過ぎているというような無批判な態度は、学問ではありません。この辺の地名というものは、復活させているのが多いのではないかと思っているんです。豊浦とか、雷という今もいう地名は、昔からそのまま残っていたものかどう



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com